

私の青春一代記

北海道 久保田 栄 一

昭和十五年五月、横浜駅にて遺族の方に遺骨をお渡しすれば私の任務は終わりであったが、駅の特別室にて御遺族の方、分会長皆様に、「時間に余裕がありませんので独断ですが川崎市までお送りいたします」とお話をしたところ、会長以下皆様に喜ばれ、川崎市の遺族の家まで捧持、皆様に感謝され帰隊した。遺族並びに分会長より金一封いただいた。

昭和二十二年四月、ナホトカにて大作業班長時代のソ連兵隊が下士官になりパン工場の責任者となっており、「ヤボンスキ・ダモイ・ハラシヨード」と、おみやげにニキログラムの黒パン一個いただき乗船。ラーゲル所長大和（大尉）さんの当番兵としてサロンにて舞鶴下船まで勤務。船内には色々な噂が流れて状況があまり良好とは言えなかった。

第一、船内に米国とソ連のスパイが乗っており、舞鶴上陸するまでは見ざる言わざる聞かざるで一切両国に閑しての話無用。したがって船内は不気味な雰囲気にも包まれていた。

厚生省の係の方が現在使用している紙幣を一メートル四方のベニヤ板に張り説明に出かけたが、一階で中止、下の船倉には音なしであった。知り合いの戦友諸氏で少々問題が起き、荒れている由。中止したほうが良いとの話で、階段から下を見渡したが穏やかでない状況。悪いが中止して、厚生省の係の方に状況説明し了解を得た。

夕食に船長、機関長その他の幹部厚生省の方四人、大和さんと私他十人余りで会長、船長、厚生省の方々に挨拶、続いて大和さんにお礼をした。

挨拶が終わって会場のテーブルの白布を取ると、紅白の刺身その他山海の珍味と二年ぶりで見る白い飯。昨日までの食事のことを考えるとまさに夢を見ているようであり、目に涙。紅白の刺身がかすんで見えなかった。この感激は終生忘れることはないと思う。他の

戦友の方に申し訳ないことだが、舞鶴上陸までお世話になり厚くお礼申し上げます。

北千島でのことを一言お話ししたいと思う。

昭和二十年三月、北千島九十一師団でカ号作戦開始、各部隊は柏原司令部に集結。私達二十人が残務整理として幌筵島南端泊山付近にて待機した。

昭和二十年六月頃だったと思うが、漁船五隻で一梯団中部千島から迫砲部隊が集結、一隻に船長、船舶工兵計十人くらい、迫砲隊約七十人が乗船し柏原に向かい航行した。ところがアメリカの巡洋艦三隻と遭遇、砲撃戦を開始した。凄い音響なので、海軍とアメリカの海戦だと思ひ三角兵舎の上に測遠器を取り付けよく見ると、海軍の艦船は見えず目に入ったのは漁船との海戦であり、漁船三隻はすでに姿がなかった。そのうち一隻は体当たり。まさに木っ端微塵とはこのことを申すのか、瞬間にして漁船は見えなくなった。残りの一隻は全速にて幌筵島南端ムサシ海軍飛行場の浅瀬に乗り上げ、船は動かなくなった。アメリカの艦船は浅瀬なので引き返した。

七十四旅団より「現場に急行せよ」との命令があったので、トラック三台に兵士十五人が乗り直行。船は機銃の穴だらけで、船長はラットのの上に倒れていた。恐らく即死と思われる。最後までラットを持ち、船長としての責任を果たして戦死。船上には十一人の戦死体と片股があり、トラックに収容。なお、重傷の見習い士官をトラックに乗せ兵二人をつけて旅団医療班に急送したが、途中で死亡した。泊山墓地に十一人と片股を埋葬。現在泊山付近の墓地に相当数の陸海軍将兵の墓があり、遺骨収集の件に関し各機関に申し入れているが現在に至るも返答はない。

昭和二十年十二月、ナホトカ上陸。宿泊地に向かう途中、道路側溝に若い兵隊が倒れたままで、目的地に着くまでに二人が冷凍人間であった。生きているうちは人間扱いであるが、死亡したらそのまま捨てておくのである。風習が違うとは言え驚く次第である。ちょっとそばに行ったらソ連兵十に気合いをかけられ銃を向けられた。わが国なら仏様であり、零下三十度以上もある雪の上に捨てておくなど考えられないことであ

る。

どのくらい歩いたか、時計がないので不明。坂を上り、平坦地に着いた。昼過ぎだったように思う。アメリカ天幕が十張りほどあり、全部日本兵でいっぱいであった。一張りの天幕に二百人くらい収容可能で、私共はなんと軍使用の国内用の天幕であった。厳寒のシベリアでの使用は無理だが、余分なく、それで宿泊することにになった。まず燃料がなかったので、幕舎の中に枯れ草を敷き、立木にロープを引っ掛けて二、三人で引っ張った。すると一〇センチくらいの太さの立木が簡単に途中から折れたので、外で燃やし、幕舎内のこたつに入れ、防寒具一切を着け休んだが、朝まで寝付かれず、目鼻は水がついて処置なしだった。何しろ土の上に草を敷いて休むのだからお手上げである。

私は痔が悪化し歩行困難。戦友達はドラム缶に雪を入れ、急造の風呂を仕立てた。戦友四人に手足を持たれ患部を温めること二日。されど良くなりならず、本隊よりナホトカ医務室に入室。暗い室内ではあるがベッドもあり、食事もまあまあであった。ただし、薬は不

足。日本の薬が七割である。夕食後に錠剤を二錠支給され、暗いのでそのまま飲んだ。翌朝も二錠、念のため見るとなんと「わかもと」であったが、痔に効果あるのかどうか。衛生兵に聞いたところでは、薬がないとの話だった。軍医殿か下士官がいるかの確認すると、下士官はいるとの話。早速来室をお願いした。まもなく年配の班長に薬の話をしたが、痔の薬など全然なし。色々話をしたところ班長の私物の薬二個を頂き、差し込んだ。初めてのことなので使用法を聞いたところ、銀紙を取って使用すればよいとの話。薬を挿入するにもなかなか入らず、かなり痛みを感じたがやっと入れ終わっても二十分くらい動けず、参った。翌朝下士官に昨夜の話をするると彼は大笑いした。銀紙の下にさらにロー紙に包んであるのをそのまま使用したからであった。

五日間くらいしたら痛みがなくなり平常に戻った感じであった。ところがソ連女医より診察の話があり、医務室に行くと女医少佐その他女医四人がおり、韓国通訳一人が怪しげな日本語で「四つんばいになれ」と

いう。白手袋をして肛門に指を入れて三、四回掻き回された。目から火が出るとはこのことか。ストップせずに行われたら完全にのびてたと思う。終わっても少しの間立てなかった。日本の軍医ならこんな診察はしないだろうに、恐ろしい目に遭った。

二日間寝たきりで痛みがやむまで静養。患者が溢れており、完治はしてないが退院することとなった。收容所長の大和さんから大作業長を命じられていたが、素人の私では無理とお断りしていた。しかし再度連絡があり、退院後、外の仕事だと痔が再発することを考えた結果、大作業班長を受けた。

昭和二十一年一月下旬より作業開始。作業人員八十三人、四十年配の宮大工さんに事情を話し、仕事のことをお願いした。二つ返事で引き受けてくれ、なかなか出来た人だと思った。私はソ連側と仕事の打ち合わせその他の件に全力投球。作業能率を上げるのに、まずロシア語を勉強。ある程度会話が出来なければと思いい、ラーゲルに帰ってから暗い室内で、紙なし、エンピツなし、集めるのが大変であった。二カ月くらいし

たら話が通じるようになった。

主な仕事は四階のビル内に事務所造りその他であったが、私が痔の悪いことを知っていたのだろうか、ソ連の上級中尉が来いと言うので後をつけてゆき、ある部屋のドアを開けて中に入った。室内は真っ暗、しかしホンノリ暖かくペチカの上に腰掛けておれば痔が良くなる、一日二、三回くらい作業を見て回れと、個人的には親切にしてもらい、仏に会った感じであった。おかげさまで日増しに良くなり感謝した。その室内には日本刀が二千振り以上あり、五振一束にして天井まで積み上げてあったが、果たして現在どのようになっているのだろうか。満州、北朝鮮、樺太、千島全島の兵力六十万余りと言われている。いずれにしても北千島師団命令により帯刀本分者刀を吊って乗船すべしと言われ、ナホトカ港上陸。全員刀をソ連に引き渡すことになりうまいことやられた。私とY氏一中隊長は三角兵舎脇の土手に奥深く埋めたが後日捜しても見当たらなかった。

昭和二十一年の三月頃と思うが、上級中尉に呼ば

れ、ソ連の事務所の付近に行き正面の入り口を見てみると、アメリカの小型ジープに見覚えのある兵隊の軍服用の人がいた。よく見ると手に手錠、驚いていると、中尉が言うことには、ナホトカの司令官が収容所に配給される糧秣をトラックで数台横流ししていたことが分かり、日本流に申すなら陸軍少将が兵に降下とのこと。間もなく車は出発、どこへ行つたものか不明。その後音沙汰もなし。日本では将官が手錠、降下など考えられないことである。

四月初旬頃のある朝、司令部内を見回り中、トラックの脇に日本兵の死体が担架に乗せられていた。早速上級中尉に埋葬の件をお願いするも受けられず、二日続けてお願いしたら午後から了解。戦友七人にてつるはし、てこを持って司令部から一〇〇メートルくらいの所に埋葬、四時間近くかかった。地下一メートル以上コンクリートと同じように硬く、三〇センチくらいの高さのところを掘る。なお、担架上の兵隊は軍服を着ていたのに翌朝見ると裸であった。誰が軍服を持っていたか、あまりのことに声も出なかった。ポケッ

トに絹の白布を持っていたので、局部にかけ紐で縛って帰った。認識票もなく、どこか誰か一切不明。二十歳そこそこの若い兵士であった。埋葬死体をソ連はどのような扱いをしているのか知りたいものである。

それから問もなく、ある日の午後、柵外で話し声が賑やかなので柵のそばに行ってみると、なんと将校大隊の一同が背中に薪を背負って来るではないか。いや驚いた。年配の将校は鼻水を流してゐる人もかなりいた。昔の面影もなかった。速射砲隊の将校が数人おり、声をかけたが北千島時代の元気はなかった。

女医より呼び出しがあり、行ってみると薬局内に柵造りの話であった。薬局に行き内部を見ると、日本製の薬品が大半である。あちらこちら見ているうちサッカリンの瓶が二〇本ほどあり、女医はローマ字が読めないのか涼しい顔をして色々話をしたが、私はサッカリンのことで頭がいっぱい。明日専門の大工を連れて来て見積もることにし早々に引き揚げた。いかにしてサッカリンを手に入れるか考えた末、岩塩を砕き水で洗い詰め替えることにし、他の分隊に岩塩を頼

み、数回洗い、どうやらサッカリンと同じような色具合になった。大工三人連れて作業中、瓶に入れ替え、一本手に入れた。見つかったら Cholman (刑務所) 行きだ。見つからずにラーゲルに持ち込み各分隊に分けた。その後二本手に入れた。ある日、女医がサッカリンの瓶の前に立っており、この瓶に何が入っているのかと聞かれ、腹の中でひっくり返るほど驚いた。致し方なし。サハールと同じものが入っていると話したら、大声で「ハラショー・カマンジュール・スパシーバ」と言うより早く一本袋に入れ、口に指を当て何回も念を押して出て行った。それはいずれみな持ち出しだなど私は感じ、それ以来要注意。どこでもある程度私は自由に入入り出来たが、薬局行きはストップした。棚を完成したことでもあり、サッカリンはあきらめた。でも各分隊、当分の間甘味料に恵まれ各分隊に感謝されたが、考えざるを得なかった。いつまでもここに居るわけにはいかないと思っていたところ、所長の太和さんより移動の話があり、早速参加、行き先不明であったが志願した。

話は前後するが、昭和二十一年二月頃だったと思う。上級中尉事務所に来るよう話があり、事務所に行き二階に同行すると、応接間の前でストップ。なにやら中の将校と話をし、ほどなく中に入れとのこと。中に一礼して入ると何と軍隊の将官その他日本兵がおり、内心びっくりした。その他ソ連側の将校、佐官、尉官八人と通訳一人。通訳の話によると北千島九十一師団第七十四旅団長閣下で、軍装は以前と同じであった。私などは軍隊で閣下と話をすることなど出来ることはなく、私の官等級、氏名、速射砲大隊通信班長であることを報告。ラーゲル内の状況を問われたが、失礼なことではあったが、会話をしたくなかった。大工作業班長を命じられ連日大工作業、人員は八十三人、現在のところは心配ありませんと報告。閣下も状況を察したのか話は十五分くらいで終わり、一礼して退室した。後で分かったことだが、ソ連中尉でスパイで巣鴨に二年、奉天に一年服役した者がいた。その間に将棋初段、日本語は通訳並みとのことであった。それまで日本語を使用せず我々の行動を監視していたと思う

と恐ろしき将校であった。

移動の件で、作業内容は上の方であったので悪い作業になるまいと思っていたが、心配でもあった。トラック二台に分乗、夕刻到着したところはなんとウラジオストックであった。日ロ漁業の四階建てビル、こんな素晴らしい日本のビルがあると思つたことはなかった。また、下の方に日本大使館があつた。朝太陽に輝いて菊の御紋章がまぶしい。

ウラジオストックでまた大作業班長を命じられ、忙しい毎日であつた。ビルの周りに塀を造る話であつたが、材料が間に合わず柵を回し、早急に完成することになり連日多忙であつた。まず下水整備のため木材が到着したので、丸太引き割り、面を取つてないので一苦勞である。幅三十センチ、高さ四十センチ、長さ二メートル、柵の長さ百二十メートル。完成に三カ月余り、ようやく終了。なお、下水の作業中水が必要であり、ビルの内からでは時間がかかり作業に影響あつたので、すぐそばに共用水道があり、歩哨の了解を得てバケツで一日四、五回くらい、これでなんとか間に

合わせた。ところが水道にはいつも女性五、六人がたむろしており、多い時は十人くらいもあり、日本流に言えば井戸端会議であるが、賑やかなこと、お祭りの騒ぎである。何回も水汲みに行くうちに、我々と話すことは禁止されているのだが、一向に気にせず話しかけてくる。彼女たちの足元をよく見たら靴を履いている婦人は一人もいない。驚き、「なぜ靴を履かないのか」と聞いたら、ないとのことである。ラーゲルに帰り、みんなと相談、サンダルを作ってみようということになり、早速五足作り、翌日現場に持参。年配の女性に見せたら手にとって離さないの困ってしまった。若い女性が、パンかマホルカとコッペの話があり、物々交換でサンダルと交換ということになり、話を決めた。その後、相場が下がつたので、火でサンダルの表面を焼き、ワラでこすり、誰かがどこかで見つけてきた赤いベルトを取り付けて、手に持ったまま見せた。競売並みであつた。高値で交換、三キロパンと。早速コッペを袋に入れ戦友に持たせ早々に帰した。

歩哨に見つかったら事である。チョルマン行きだ。女性群の間でも話が広がっているようなので、ちょっと休んだ。女性群は日本の着物でワンピースを作り、それがまた良く似合うので感心の至り。紋付を着用していた若い女性が目の前に立っていた。なにげなく前を見たところ、その下に紋が付いている。思わず笑ったが、先方はなぜ笑ったかわからないと思う。当分の間、パン、マホルカ、バピロス、不自由しなかった。ちよっとの間であったが満腹できたことと思う。

昭和二十二年十二月二十日頃だったと思う。衛生兵一人、兵七人で漁労班を編成。列車にて場所はどこか良くわからないが下車し、トラックにて三十分くらいも乗車していたらうか、物置のような所に歩哨二人と七人入った。ここがラーゲル並みで、二食携行、当日の昼夜は食事したが翌日から何一つ食料なし。歩哨は三度食べているものの我々には何もなく、水だけである。一日、二日、三日目になったら体が自由に動かない目まいがしそうだった。これでは死を待つよりはかないが、歩哨にいくら話をしても、わからないと

のこと。三日目の日、食べ物を見つけてくると申し入れたが歩哨は何も言わなかった。

二人一組になり歩いたが、ヒザががくがくし蟹の横歩きと同じでなかなか前に進まない。雪を食べながら、すぐ目の前にあるソ連の民家になかなか到着しなかった。やっと漁夫一人が網仕事している所に着いた。食べるものが欲しいと三日も食べずにいる話をすると、黒パンとスープを食べさせてくれた。その代わりに網仕事をすることになった。引き網は川の中を無理やり引くので、木の根その他に引っ掛け穴だらけ。よくあれで鯿が入るものだと感じた。とれた鯿はそのままボチカ（木の樽）の中に入れてたが、後でどのような作業をするかは不明。しかし食べてみると彼ら独特の味付けであったが凄く美味なり。そこで腹ごしらえできたので少々元気がついた感じだった。思い切つて遙か彼方の民家まで行くことにし歩いたが、雪路のため苦勞の末ようやく着いた。二人とも雪の上に座り込んだが、体力の消耗がすこぶる大でしばらくものも言えなかった。民家はクリスマスで留守。家の人には

申し訳ないが、戦友のことなど考え脱殻しないもみを袋に詰めた。ポチカの中を見ると例の罾が入っており、一匹かじりついた。うまかった。罾十四ともみを担いで、やっとラーゲルに到着。他の二組は何か少々食べて来たようだが、持参したものはなかった。歩哨に人員異常なきを報告。早速飯盒にて煮る間もなく食べたが、一口噛んではからを吐き、食べるのも大変。やっと食事が終わり一時間くらいも休んだらうか。外で車の音がするので出て見るとトラックに牧草満載。糧秣はなんにも下ろさずどこかへ行ってしまう、我々はショックだった。

トラックの兵と歩哨が何か話をしたらしく、すぐ支度をして帰るとの話。我々は何がなんだかわからなかったが、ダワイの連発で、速やかにウラジオストックの方向に行軍。二十分くらいも歩いたらうか。一同大便を催し、雪上に全員血便。先程のもみ付き食事のせいだと思うが、歩哨はそんなことに関係なくビストレダワイである。全くもって人間扱いではない。肛門に痛みを感じ歩行困難だが、歩哨はそんなことお構いな

しでビストレダワイの連発。どのくらい歩いたらうか。ウラジオストック近くの駅前で列車に乗せられて、夕方、どこか分からない小さな駅に到着。今度はトラックに乗車して、ラーゲルに着いた。ウーゴリナヤという所で人員五百人くらいの小さなラーゲル。ここでも大工と一時労働に従事。入所して間もなく元の中隊戦友五人が入所してきた。三戸与三郎、白岩栄作、鈴木某その他二人は氏名分からず。帰りは同じく米山丸に乗船した。

ソ連には正月などない。一月一日に「建物の基礎工事の穴掘り作業、縦一メートル、横二メートル、深さ一・二メートル、これを二日間で仕上げよ」とソ連側の命令である。所によつては一・五メートルくらい凍っている所もあり、えらいことになった。スコップとつるはしを持って現場に向かう。歩哨が到着順に場所を決める。私の隣の戦友（私より二つくらい若いようだった。私は三十歳になったばかりである。）と、二日ばかりで掘ると翌日また凍って苦勞するだらうから、共同で一日で掘り上げるべきと相談したところ、

二つ返事で決まった。燃えるものなら何でもよし。板切れ、ボロ切れ、戦友が灯油オイルの廃油を地面にまき火を付けた。油が入っているので一時物凄い火勢。

歩哨に注意されたが、そのうち火が弱り、まず一安心。早速スコップで掘ってみる。硬いけれどスコップ半分くらい刺さるので二人とも気合いが入り、上衣を脱ぎ、一スコップごとに軟らかい土、しかも粘土である。嬉しかった。一回ごとにスコップにいっぱい土が入るので、見る見るうちに掘り下げた。他の方をちょっと見ると、まだ、表面をテコやツルハシで作業していたが、それから間もなく二人とも裸になって掘り出した。歩哨は我々の仕事を見ていたが一言もなかった。二時半頃に作業が終わり、歩哨はダモイハラシヨウと言うけれど車なしでは帰れず、小屋の中で汗を拭き服を来て時間まで休んだ。翌日一日は寝たきりであった。

昨日の仕事は無理なものであったと思う。マイナス三十度以上もあるシベリアで、しかも裸で、短時間であれほど作業がよくできたもの、そして凍傷によくな

らなかつたと思う。若気の至りである。いま思うと寒気を催す。

それから間もなくしてラーゲル内に東京ダモイの話が流れた。今までも何回となくだまされているので半信半疑であったが、ラーゲル内は今までは湿った空気だったのに一変して賑やかになり、戦友諸氏の顔も何となく晴れやかである。それから二週間くらいして朝の点呼のときに日本の所長より東京ダモイの話があり、一同大喜びであった。近く第十二ラーゲルに移動とのことで、後始末に一週間余りかかった。トラックに便乗。一時間ほどして第十二ラーゲルに到着。炭坑の町であった。下車し谷間の方を見ると墓地が数カ所あり、かなりの戦友が亡くなっている様子だった。我々一同を音楽で迎えてくれた。指揮者は有名な近衛さんで、団員五十人、楽器は全部手造りであった。

ラーゲルを出発するときにもまた音楽で送ってくれた。ありがたいことであり、異国の地にて近衛さんに送迎していただくなど夢にも思ったことはなかった。

感激、厚くお礼申し上げます。なお、近衛さんはソ連に

て死去された由承っている。合掌。

ほどなくトラックに乗車し、出発したが、話ではナホトカ行きであるが、着いてみなければ分からない。なにぶん再三再四のダモイであるから。何時間くらい乗っていたらうか、今度は間違いなくナホトカ到着である。まず一安心なれど、私が以前いた時のナホトカの姿ではなかった。ラーゲル内が赤旗で埋まり、スターリン、レーニンの畳一枚くらいの大きさの絵が至る所に張っており、ラーゲル内は騒音と赤旗で頭の具合が悪くなる。建物の角に腰掛け、ラーゲルの状況を眺めていたところ、突然声をかけられ後ろを振り向くと、ナホトカで大作業班長時代の若い戦友であった。ラーゲルのあまりの変わりように驚き話をした。なんと「昔のことは忘れて下さい。帰るために反動分子と見られんようにして下さい、頑張ってください」と話をし、事務所に行ったようだった。彼は幹部になり相当幅を利かせているようであった。昔のナホトカはどこかへ飛んでしまったのか、恐るべきナホトカになっていた。大和さん（収容所所長）のところに

挨拶に参上。状況があまり良くないので、早々に退出。何しろ反動分子と見なされると、第一、第二、第三と兵舎があり、第二ならまだ見込みがあるようだが、第三に入ると再度作業隊に逆送ともっぱらの噂であった。恐ろしいことである。一日中歌を歌い、スターリン万歳をしなければならぬ。これが仕事なのかもしれないが。

いよいよナホトカと別れる日が近づいた空気であった。ダモイ人員の調査が始まり、戦友一同戦々恐々であった。

昭和二十二年四月十二日ナホトカ港に集結。我々がナホトカに上陸したとき五千トンの船が着く棧橋埠頭など何もなかった。食料を荷揚げするのに一苦労したものである。若い娘達は缶詰の入った箱をどのくらい運んだであろう。埠頭があればこんなことはなかったと思う。それが何と、かなりの広さが埋め立てられ立派な埠頭が完成。一万トン級船舶三隻が停泊可能。埠頭には移動式クレーン三基（九十トン荷役可能との由）、これは皆満州より持って来たらしい。とにかく

戦友の手で見事な埠頭ができたのであり、ご苦勞様であつた。

その埠頭に船尾に日の丸をつけた船がいた。米山丸であつた。我々が乗船するらしい。いよいよ乗船のときがきて、右側にソ連兵、左側に厚生省の方々。双方で名前を呼び、呼ばれた者はタラップを一步一步どんな気持ちで乗船したろうか。皆それぞれ複雑な気持ちだつたと思う。船の甲板に一步足を入れたとき、ようやく安堵。船室に落ち着いたようである。乗員総數二千人余り。航海も無事予定通り舞鶴上陸。検査、衣服受領。その後一週間余り宿泊した。

昭和二十二年四月下旬舞鶴駅から乗車。駅に大学生さんが大勢おり、代表者が「これから懐かしの郷里に帰るので私どもが車内で事故のないようお世話します」と。誠にありがたく感激であつた。東京まで同乗。その間、食事の件その他よろず心配してくれた。国内のあまりの変化にただ驚きである。名古屋、浜松、東京まで列車から見る限り工場も民家も皆焼失、一望千里。国民の皆々様のご苦勞のほどが忍ばれる。

上野駅で東北、北海道方面に行く者は乗り換え。その間一時間くらいあり、自由行動。上野駅の裏通りを歩いてみたが、それが闇市という所だとの話。金さえ支払えば品物何でもあり。我々はただ眺めるだけで帰つた。何せ懐には残金が少々であつたので使用不可能、情けなし。

上野駅にて乗車、一路北海道に向けて列車は走る。津軽海峡を渡り、函館港上陸。駅の周辺は闇物資を運ぶ人達で溢れていた。間もなく乗車。小樽方面に向かい列車は走る。列車内で一泊、翌朝六時頃に小樽駅到着。市役所の方數人が迎えに来ておられた。下車人員六人。北海ホテルにて暫時休憩。ホテルのロビーで少し待っているとボーイさんとケーキを持って来られ早速頂いた。何年ぶりのコーヒーの香り。そのうまさはいまだに忘れられない思い出である。

やがて皆様とお別れし、ホテルの方、役所の方等にお礼を申し上げて徒歩にて我が家に帰つた。家に到着。カーテンの隙間から家の中が見えた。何かストロブで仕事をしている様子。声をかけたら食事の支度中

なのか全部持って二階に行く。我が家は角にあるので横に回り「シベリアよりただ今到着」と大声で話すと、二階の窓を開けて初めて安心した様子。私は何が何だかわからなかったが、米兵がややこしい日本語で話をし、家に入るとの噂があったらしい。それで二階に上がるも、そんなことはないようであった。御先祖様に帰国の挨拶をし、やっと我が家に落ち着いた感じがした。

なお、「シベリアの地にて亡くなられた六万余人の方々の霊よ、安らかなれ」と祈ります。

生年月日 大正七年一月十七日

昭和十三年五月 徴兵検査、甲種合格

昭和十四年五月 旭川歩兵二十六連隊歩兵砲中隊現役入隊

昭和十五年三月 現役兵入隊、教育係を命じられる

五月 遺骨受領各連隊より二人、師団曹長の指揮下に入る

総員十七人、七泊八日の予定にて神戸港に向かう

臨時召集兵教育のため再度教育係命じられる

北支派遣要員として旭川出發
同月二十三日大阪港出帆、北支ターク港上陸

独立歩兵二十七大隊武邑作戰参加その他四回

滄野野戰病院入院

滄野野戰病院退院
中隊復帰、部隊河北省より南下、山東省萊陵県に移動

中隊作業班長を命じられ、兵舎三棟、望楼五階建て一基、トーチカ一基完成

玉成庄分遣隊長を命じられる

大隊本部内第一中隊分遣隊長を命じられる

を命じられる

昭和十六年一月

二月

三月

九月

昭和十七年二月

五月 中隊復帰

六月 復員のため大隊本部集結

朝鮮經由陸路帰隊

七月 旭川北部二部隊速射砲中隊復員

七月二十日 現役満期除隊

昭和十八年八月 旭川北部二部隊速射砲中隊に召集

九月 旭川北部三部隊にて四十七メートル速射砲大隊編制要員として参加

十月 小樽港出帆

十月下旬 北千島占守島長崎港上陸

昭和二十年十一月三十日 北千島柏原港出帆

十二月七日 沿海洲ナホトカ港上陸

昭和二十一年六月十九日 ウラジオストック收容所到着

七月 ウーゴリナヤ收容所到着

昭和二十二年三月 第十二收容所到着

四月 ナホトカ第一收容所到着

四月十二日 ナホトカ港出帆

四月二十日 舞鶴港上陸(米山丸)

四月二十九日 帰宅

十月まで自宅にて休養

十一月より母の稼業の手伝いをし、後を引き継ぐ。青果物の統制廃止後食堂を始め、平成六年まで営業。年齢的に無理と判断し廃業。

軍隊十カ月 抑留三年

岩手県 松浦 竹治

軍隊十カ月 抑留三年

岩手県 松浦 竹治

弘前八連隊に現役兵として入隊して七日目に北満の山^{ザシシフ}神府へ送られたのは、昭和十九年の十月と記憶している。弘前野砲隊ということであるが、長靴でなく地下足袋、竹の水筒という姿で古兵の前に整列したものである。だから、「貴様たちのようなふざけたものが来たのか、